

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04534

研究課題名(和文)「領域・教科を合わせた指導」の指導案及び授業改善のための継続的実践事例研究

研究課題名(英文) A Continuous Case Study of Guidance by Integrating Domains and Subjects to Improvement of Lessons and Lesson Plans

研究代表者

名古屋 恒彦 (NAGOYA, Tsunehiko)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：10320730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、知的障害教育の指導形態である領域・教科を合わせた指導の指導案改善及び授業改善を継続的な事例研究により検討することを目的として実施した。
領域・教科を合わせた指導の指導案を分析し、その改善と授業改善を行った。これらの結果に基づいて、領域・教科を合わせた指導の指導案を作成する上でのポイントを整理し、「『領域・教科を合わせた指導』指導案作成のポイント(試案)」を作成した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to consider characteristics and processes of improvement of guidance by integrating domains and subjects to Improvement of Lessons and Lesson Plans through analysis of lesson plans and lesson records.
Based on the result, I made "an instruction plan of lesson plans of guidance by integrating domains and subjects".

研究分野：特別支援教育

キーワード：領域・教科を合わせた指導 指導案 授業改善

1. 研究開始当初の背景

生活単元学習等に代表される「領域・教科を合わせた指導」は我が国の知的障害教育において、戦後当初より大きく位置づけられる指導の形態である。『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』（文部科学省、2009）では、以下のように述べられている。

「各教科等を合わせて指導を行う場合とは、各教科、道徳、特別活動及び自立活動の一部又は全部を合わせて指導を行うことをいう。知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校においては、この各教科等を合わせて指導を行うことが効果的であることから、従前、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習などとして実践されてきており、それらは『領域・教科を合わせた指導』と呼ばれている。」（文部科学省、2009）

「領域・教科を合わせた指導」の効果は歴史的に長く認められながらも、その一方で、指導手続きや指導内容が曖昧であるとする指摘もしばしばなされてきた。

『特別支援学校小学部・中学部学習指導要領』（文部科学省、2009）においても、「各教科、道徳、特別活動及び自立活動の全部又は一部を合わせて指導を行う場合には、各教科、道徳、特別活動及び自立活動に示す内容を基に、児童又は生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、具体的に指導内容を設定するものとする」ことが求められている。

「領域・教科を合わせた指導」は、知的障害教育においてその効果や意義が認められる一方で、指導内容や指導方法のあり方に課題を有していると言える。

本研究代表者は、平成 23 年度学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（課題番号 23531273）「重複障害者の自立をめざす『領域・教科を合わせた指導』の継続的実践事例研究」（研究期間：平成 23 年度～平成 25 年

度）（以下、「前研究」）において、重複障害者を対象とした「領域・教科を合わせた指導」の指導案・授業記録を、自然言語を分析する質的研究法として近年、教育分野でも活用されるテキストマイニングによって分析した。

その結果、分析対象とした指導案において、児童生徒に講じられる手立ての意図が多義的で曖昧な場合があることを指摘し、手立てを適確に実施するには、指導案段階で意図を明確にする必要があることを課題として指摘した。前研究は、重複障害者を対象として限定した研究であったが、指導案の記述の曖昧さの改善は、すべての「領域・教科を合わせた指導」の授業を改善する上で必要と考えられる。しかもそれは、単に主観的な読み取りの精度に依存するのみではなく、客観的なエビデンスを有することも重要である。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、「領域・教科を合わせた指導」の事例的な授業研究を継続して行うことにより、改善し、その成果を事例報告としてまとめたい。

指導案の手立ての意図の曖昧さの改善を、次の 2 つの点に絞って行う。

- ・「領域・教科を合わせた指導」の指導案における手立ての記述の改善

- ・「領域・教科を合わせた指導」の指導案改善箇所に関する授業成果の分析

すなわち、指導案改善と授業改善の 2 点を継続的な事例研究により、検討する。

以上を踏まえ、授業成果につながる手立ての記述の仕方を「『領域・教科を合わせた指導』指導案作成のポイント（試案）」として整理する。研究期間は 3 年とする。

3. 研究の方法

「領域・教科を合わせた指導」を継続して実施している知的障害特別支援学校 1 校を研究対象校とする。そこで行われる「領域・教

科を合わせた指導」の指導案分析及び授業分析を継続的に行い、その結果に基づき、指導案中の手立ての記述の改善を図ると共に、実際の授業場面での授業改善につなげる。

研究対象校は、「領域・教科を合わせた指導」の授業研究を行っている知的障害特別支援学校 A 校とする。

A 校は、「領域・教科を合わせた指導」である生活単元学習や作業学習を週 10 単位時間以上設け、月曜日から金曜日まで毎日実施しており、継続的な授業研究を行う環境としても適している。

対象授業は、研究対象校の小学部で行われる生活単元学習の 1 単元を対象とする。生活単元学習は、「領域・教科を合わせた指導」の代表的形態であり、多様な題材・集団で行われるが、対象授業は小学部 1 学級における生活単元学習とする。なお、当初、遊びを題材とした小学部児童全員(約 40 人)を予定したが、定点でのビデオ記録の容易さ等から、前記授業に変更することとした。

研究代表者は A 校を訪問し、授業者との授業検討及び授業研究会に参加し、A 校の実践への理解を深めると共に、提供された指導案、単元の経過を追ったビデオに基づき、研究を進める。

対象児童は、平成 27 年度及び平成 28 年度における授業研究を進める上で、対象授業に参加する児童の中から事例対象児童 1 人の協力を得ることとする。

平成 27 年度の研究は以下の方法によって行う。

テキストマイニングによる指導案分析

評価分析システム「TRUSTIA/R.2」(ジャストシステム)を用いて、テキストマイニングにより分析する。分析対象となるデータは箇条書き化された文章となるが、本研究では対象授業の指導案の中の、児童の個別の手立てを分析対象とする。テキストマイニングの具体的な方法は、前研究の方法及び、本研究

と同じくテキストマイニングによって主体的な姿を目標とする授業の指導案分析を行う。

個別の手立ては、1 人の児童につき、2 件ほどが記述されるので、分析対象となるデータは、1 学級の児童数 6 人の場合、12 件前後となる。これらをデータ中の形容詞句及び動詞句に着目して分析し、手立ての意図の傾向を分析する。テキストマイニングにより、手立ての意図が多義的で曖昧なものが抽出されるので、対象指導案の記述の課題を明らかにできる。こうして把握した記述の課題を整理する。

分析カテゴリーによる授業分析

テキストマイニングによって抽出された意図が多義的な手立ての中から授業場面での手立てとそれによる児童の変化を確認できるものを数点程度あげ、意図に即した児童の変化を記録できる分析カテゴリーを作成、インターバルレコーディング法により授業分析を行う。素材となるビデオは、対象授業の指導案授業日及びその連続する前後回の計 3 回のビデオ記録を使用する。

その結果から、授業回を追う中で手立てを講じたことによる児童の活動の変化及び変化と手立ての関係を分析する。

平成 28 年度は、平成 27 年度における課題の改善を行った指導案及び授業の分析を平成 27 年度と同じ方法で行う。

平成 29 年度は以下のようにまとめと成果の発表を行う。

結果の整理

平成 27 年度、平成 28 年度の研究結果から、
・手立ての意図の記述の曖昧な事例
・手立ての意図の記述の改善指針
・授業分析による授業改善の経過
を整理する。

「『領域・教科を合わせた指導』指導案作成のポイント(試案)」作成

以上の成果を「『領域・教科を合わせた指導』指導案作成のポイント(試案)」として整理し、発表する。

4. 研究成果

(1)平成 27 年度

小学部2年学級(児童数6人、授業者4人)が実践した生活単元学習における製作活動部分を対象授業として、指導案のテキストマイニング及び授業ビデオのカテゴリー分析を行った。

テキストマイニングによる指導案分析は、評価分析システム「TRUSTIA/R.2」(ジャストシステム)を用いて、テキストマイニングにより分析した。分析対象となるデータは箇条書き化された文章となるが、本研究では対象授業の指導案の中の、児童の個別の手立てを分析対象とした。テキストマイニングの具体的な方法は、以下の通りである。

個別の手立ては、1人の児童につき、2件ほどが記述されるので、分析対象となるデータは、1学級の児童数6人の場合、12件前後となる。これらをデータ中の形容詞句及び動詞句に着目して分析し、手立ての意図の傾向を分析した。テキストマイニングにより、手立ての意図が多義的で曖昧なものが抽出されるので、対象指導案の記述の課題を明らかにできる。こうして把握した記述の課題を整理した。

分析カテゴリーによる授業分析の方法は以下の通りである。テキストマイニングによって抽出された意図が多義的な手立ての中から授業場面での手立てとそれによる児童の変化を確認できるものを数点程度あげ、意図に即した児童の変化を記録できる分析カテゴリーを作成、インターバルレコーディング法により授業分析を行った。素材となるビデオは、対象授業の指導案授業日及びその連続する前後回の計3回のビデオ記録を使用した。

その結果から、授業回を追う中で手立てを講じたことによる児童の活動の変化及び変化と手立ての関係を分析した。

テキストマイニングでは、指導案での手立て記述における意図の不明なものが指摘されたが、実際の授業においては意図が不明の

手立てについても、児童の主体的な姿(活動の継続)に資するものであったことが示唆された。

このことは、手立てが文字化される以前に、児童の主体的な姿(活動)が目標として前提されていることによると考えられる。その意味で、当該の手立ては授業においては有効に機能したと考えることができる。

(2)平成28年度

小学部3年学級(児童数6人、授業者4人)が実践した生活単元学習における製作活動部分を対象授業とした。対象学級は平成27年度における研究対象学級と同一である。平成27年度と同じく指導案のテキストマイニング及び授業ビデオのカテゴリー分析を行った。

その結果、テキストマイニングでは、平成27年度における研究で明らかにされた指導案での手立て記述における意図の不明な部分が改善され、記述とその意図の対応関係が明確になった。これは、授業における目標と手立ての対応関係の精度向上を意味するものでもある。分析カテゴリーによる授業分析では、指導案上の手立てが講じられた後に、活動の継続性が向上したことが示唆されている。意図の明確な手立てが、精度の高い成果をあげていることが考えられる。活動の継続は、児童の主体的な姿の指標でもあり、その点、テキストマイニング、分析カテゴリーいずれの検討においても、授業改善が図られたことが示されたと考えられる。もとより、1年を経ての授業実施であることから、多様な要因による対象児童の成長があることは言うまでもない。しかしながら、その中で、分析カテゴリーによる授業分析が示した手立てとの関係での活動の向上は、手立ての有効性を示唆する側面を指摘することは可能であろう。

(3)平成29年度

研究のまとめとして、「領域・教科を合わせた指導」指導案作成のポイント(試案)を

以下の３点で整理した。

授業の目標に即した意図を指導案で明確に示す。

手立ての意図は、一文に一つとして絞り込んだ記述をする。

手立ての分類整理には、授業の目標に即した観点を採用することが有効である。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕(計１件)

名古屋恒彦、「領域・教科を合わせた指導」の指導案改善のための事例的研究、日本発達障害学会第 52 回研究大会、2017

〔図書〕(計１件)

名古屋恒彦、「領域・教科を合わせた指導」の指導案及び授業改善のための継続的実践事例研究報告書、2018、22 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

名古屋 恒彦 (NAGOYA, Tsunehiko)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：10320730